

経済は地理から学べ (後編)

{ 第三章 貿易～世界中で行われている駆け引きとは }

*なぜトランプ大統領は TPP から離脱するのか～TPP 協定は環太平洋戦略的経済連携協定の略で元々はシンガポール、チリ、ニュージーランド、ブルネイの4ヶ国で始まり米国が参加表明で拡大日本、オーストラリア、ベトナム、ペルー、マレーシア、カナダ、メキシコの計12ヶ国で世界に占める割合は人口約11% GDP約36% 貿易は約26%と世界最大規模の自由貿易圏が実現する見通しだった。TPP協定は企業が政府より大きな力を持つてしまう可能性がありトランプ大統領は小さな政府と自由貿易に関して否定的で大きな政府、保護貿易主義を掲げている＝米国内の雇用を守り新たに多くの雇用を生み出す。

*日本のEPA（経済連携協定＝幅広く経済強化を目指した貿易や投資の自由化・円滑化を進める協定）に学ぶ「本当のwin-win」とは？

日本が初めてEPAを結んだシンガポールは都市国家で淡路島より少し大きいだけの国土、人口は約560万人、農業生産の対GDP比率は0.03% 耕地面積0.94%と（日本は1.22%と12.4%）農業従業者は約2千人でお互いに農業が受ける打撃はほとんど考えられない。「メキシコ」は農産物の輸出国なのに何故締結できたか？日本企業がメキシコに生産拠点を設け部品や原材料を送り、完成品をメキシコから米国やEUへ輸出し関税を殆どゼロにするメリットを日本側が重要視、日本国内農家を守りたい人達を説得して難産の上EPA締結。

*オーストラリアの稼ぎ方＝豊富な資源を自国利用しない～主産業は農牧業と鉱業、農業従業者一人当たり耕地面積は860ha、カナダ202ha、米国168ha、日本3.6ha 鉱業では輸出統計で鉄鉱石とボーキサイトで世界一位、銅鉱石三位、ニッケル鉱石第四位、他にも石炭世界一位、天然ガス世界第五位。

「工業が発展しない二つの理由」①国内の市場規模が小さい＝人口24百万人

②資源産地と大都市が離れているので陸上コストがものすごくコスト高となる

オーストラリアは製造業があまり発達しないので単純労働者や低賃金労働者といった人材供給をする必要がなく最低賃金水準が日本や米国の約2倍、物価も高い国として有名、外食産業では外国企業が進出して成功した事例は殆どない。「対オーストラリアドルの円高」で割安感を生み多くの日本人が移民した。

*物地理的距離は4000km！～米国は木材を売る？ 買う？～米国のメガロポリスはボストンからワシントンDC迄の960kmにわたる地域で約5千万人世界的な規模で見ても巨大な経済圏を形成～木材需要は人口が多い大都市で高くなる～印刷・文書用の紙消費量は1秒当たり世界で4トンの消費、木材の用途は建築、土木、紙、家具、建具、木箱、梱包、薪炭材等多岐にわたる、

米国は世界的な森林国家で森林面積は33、9% 日本の国土面積の8、6 倍と恵まれているがカナダから木材を輸入、理由は米国の森林は西部・南部地域に集中していてメガロポリスの人口集中地域までは4千kmもあり安価な木材は長大な物資輸送に適していません、そこで太平洋岸からアジア諸国に向けて輸出(日本の木材輸入相手国は一位カナダ、二位米国、三位ロシア)

* ブラジルとヨーロッパを結ぶ意外な産業とは＝国を挙げて育てた航空機産業、鉄鉱石、ボーキサイト、水力に恵まれ更に肉類(牛の飼育頭数は世界最大)砂糖(サトウキビの生産は世界最大)大豆(生産量世界第二位)ブラジルは1969年国営として後に民営化したエンブラエル社が現在小型旅客機を製造、この分野ではカナダのボンバルディア社と世界シェアを二分している。

* 航空連合の登場で市場が変わりEU域内で小型旅客機の需要が高まった～航空連合とは複数の航空会社が連合して結成した組織で共同運航・マイルサービス等の共有化等提供、航空連合は3つでスターアライアンス(全日空加盟)ワンワールド、スカイチーム、航空連合が登場してハブ&スポーク路線の整備で拠点空港と各都市の空港を放射線状に結ぶ整備が進み輸送効率が向上・輸送量増加～EU域内では小型旅客機の需要が高まった、更にEU域内の航空自由化が進められ航空運賃も下がりLCCがEU市場で約4割のシェアに。

* 中国の14億人を支える食材とその危うさ～中国が1979年に1人っ子政策を採用したのは増え続ける人口を支えるだけの食糧供給量が得られないという危惧からでした、1995年を100とした場合に2015年にかけての輸入額は肉類6950、乳製品5333、水産物1080、野菜果実5235、家畜用飼料1181等で2007年迄には、農林水産物の貿易収支は黒字、2008年からは大幅な赤字に。

～中国は世界一の養豚国～ということは、大豆生産は米国・ブラジル・アルゼンチンに次いで生産高は多いにも拘らず2000年以降輸入超過で、1990年からの20年間で生産は1、5倍一方国内供給量は約5倍と輸入量が激増した、中国の豚の飼育頭数は世界の48、7%を占めていてその数は4億7592万頭、牛が1億1350万頭世界三位、羊が1億8270万頭・ヤギ1億7400万頭・鶏47億4200万羽で各々世界一位と世界的畜産国、その為に飼料として大豆需要を押し上げていて、世界で生産される大豆の20%を輸入(自給率は15%程の低下)ブラジルは輸出入とも最大相手国が中国で近年関係が緊密化。

～中国の国内大豆が高い理由～大豆を生産するには多くの水が必要で工業用水・都市部との間で水資源の取り合いが起きている。

* ブラジルの大豆生産は日本の技術で生産量100倍に！政府プロジェクトとして1979年よりサバナ地帯の開発に着手、熱帯土壌で強酸性アルミニウムを大量に含み土地改良や品種改良、栽培技術の改良で協力したのが日本「ブラジル版緑の革命」と言われ2001年迄続けられ1975年比で2010年には約100倍に迄拡大、 P 2

但し森林の消失、先住民の土地所有権を奪う等負の側面もある。

- * 中国の投資を急ぐタンザニアのポテンシャル～今、中国が最も目にかけている国の正体、1965年南ローデシア共和国が独立、アパルトヘイト実施、同国を經由しないで銅の輸送経路としてタンザニア鉄道の建設が始まり中国は無利子で4億32百万ドルの借款と2万5千人の中国人労働者を提供、現地労働者約5万人との協力の末で1976年に完成、1956年以降の中国のアフリカへの経済援助額は440億人民元(日本の約半分の金額)中国の対アフリカ輸出は2002年50億ドル、2008年には500億ドルへと拡大している。
- * 全てが右肩上がりのタンザニア～直接投資額は旧宗主国のイギリスに次いで中国は第二位、特に製造業への投資が7割を占め道路や橋・パイプライン・港湾等社会資本整備案件を中国が受注し、なくてはならない経済パートナーしかし「安かろう・悪かろう」の中国製品に対する不満の声も大きいと。1964年建国当時1140万人だった人口は2015年現在5229万人に、国連推計では2050年にはおよそ1.4億人タンザニアは鉱物資源だけでなく農産物などの原材料が豊富且つ安価、更に外国資本の投資を最優先課題として投資に対して非常に協力的であり日本からの新しい投資先としても如何かと・・・
- * 豊かな資源を持つナイゼリアのケース～貿易黒字でも経済が発展しないメカニズム輸出品目は一位原油82.8%・低硫黄で品質が良い、輸出1140億ドル・輸入357億ドル貧富の差が是正されないで初等教育は就学年識字率70%位と問題、国内市場は拡大せず輸入が振るわない、アフリカ最大の人口・公用語は英語200とも300ともいわれる多民族国家で政情安定の難しさ1967年5月にビアフラ共和国(支援は仏と南アフリカ共和国で両国は原油狙い)として独立宣言、ナイゼリア連邦軍(支援は旧宗主国英国とソ連邦)とのビアフラ戦争は長期化1970年1月ビアフラ共和国降伏。

{ 第四章 人口～未来予測の最強ファクター }

- * 土地も資源もない日本が何故経済大国になれたか?～日本が持つ二つの強み、1582年イエズス会のフィリピン総督宛の手紙「日本は私がこれまで見てきた中で国土が不毛且つ貧しい故、求めるべきものは何もない、しかし国民は非常に勇敢でしかも絶えず軍事訓練を積んでいる為、征服が可能な国土ではない」と、では何故に日本が経済大国になれたのか、その要因は
 - ① 教育水準の高さ～江戸末期における識字率50%超
 - ② 人口の多さ～同じ業種でも多くの企業が存在し競争が技術水準を上げ～日本は貿易立国ではなく内需依存型
- * 人口増加に欠かせない二つの要素～① 就業機会 ② 食料供給量
～ドイツの地理学者A・ペンクは地球上に収容可能な人口を約160億人と算出～農業の始まりで5百万人程の地球の人口は西暦元年2億5千万人に、

1845年アイルランドでジャガイモの不作による大飢饉・北海道より少し小さい程の面積、鉱工業も発達せず実質的にイギリスへの食糧供給地だった、領主は多くの税金が取れる様農地を細分化、飢饉で虫の息になった農民達を追い出し当時800万人超の人口で約150万人が飢えて命を落とし更に100万人以上米国へ渡ったその子孫はジョン・F・ケネディ、ドナルド・レーガン、ビル・クリントン、バクラ・オバマ4人大統領の先祖がいた、米国にはアイルランド系の人口は36百万人と本国の人口より断然多くヨーロッパ系白人の出身地としてドイツ系に次いで多い飢饉の後アイルランドは1990年国民一人当たりGDPで日本の半分程が2007年6万1388ドル(日本3万403ドル)米国4,8万ドルと豊かになった～1990年代アイルランドは法人税率を下げ海外の企業の投資を促した結果製造業のみならず金融業や保険業も進出今では就業機会も増え米国に渡った人達の子孫が「帰還」する事例が増えている。

* 人口大国の共通点は「5つの農作物」米・麦・茶・綿花・ジャガイモで、一位は中国、二位はインド～何故アジアでコメの生産が盛んなのか～モンスーンの影響を受け夏季に多雨となる東・東南・南アジアでコメの生産量は世界シェアの9割、そしてその地域の生活人口は世界の55%水田は殆ど連作障害を起こさず1ヶ国当たりの人口が多くなり易いヨーロッパは連作障害が起こり易い畑作を中心としている為に人口支持力は高くない「綿花と人口の関連性」多くの労働力を必要とする労働集約的工業であり、その為に就業機会が増え人口も増えていく。

* 4つの国家群の比較と地域統合のメリット～世界には ①EU(ヨーロッパ28ヶ国連合) ②NAFTA(北米3ヶ国自由貿易協定) ③MERCOSUR(6ヶ国南米共同市場) ④ASEAN(10ヶ国東南アジア諸国連合)これらのメリットは

1. 貿易の際に発生する関税を撤廃もしくは関税率を低くできる

2. 関税以外の無駄や手間を省ける～人口では～

① EU 5,1億人 1国当たり約18百万人

② NAFTA 約4,8億人 1国当たり1,6億人

③ MERCOSUR 約3億人 1国当たり約5千万人

④ ASEAN 約6,3億人 一国当たり約63百万人・貿易額の対GDP比では唯一100%達成で海外需要を積極的に活用した経済体制を持っている。

又、人口も多く一人当たりの購買力が高ければ域内需要が拡大しより魅力的な市場に成長する。

* なぜ人は東京に集まるのか

① 沿岸部に立地～ほとんどの資源を海外から

② 後背地が広い～関東平野という土台も東京を支えている(東京・大阪・名古屋の共通点)洪積台地＝山の手(平野より一段高く城を構築)沖積平野は河川の堆積作用で形成された平野で地盤が軟らかい下町・城下町。下町→山の手→郊外の順に都市が発展。

- * 少子高齢化でも売り上げを伸ばしている意外なビジネス～まず少子化が起こり後で高齢化、人口を維持する為には合計特殊出生率は2.1程度必要、1947年の日本は4.54 第二次ベビーブーム後 1975年から2.0を下回り1989年1.57 2005年1.26と史上最低「スーパー戦隊シリーズのおモチャ」は少子化の影響を受けず 48億円を底に100億円を超え、少子高齢化の中でも依然として高い、2015年には12体の巨大なロボ登場、客単価を上げ販売額を減らさない工夫もされている。
- * 中国の光と影・一人っ子政策の廃止～1962年から都市部限定の人口抑制策 1979年から一人っ子政策で特典 ①月収の約一割の報奨金を14歳迄 ②学費免除 ③学校への優先入学 ④医療費の支給 ⑤就職の優先 ⑥都市部に於ける優遇配分 ⑦年金の加算、逆に二人目をもうけた家族には罰金その額は年収相当の数年分、農村部では子供は貴重な労働力その為女の子や次男・三男が生まれても戸籍に登録しない、学校に通えず、医者にかかれずこの世の存在しない子供達が 2010年の戸籍調査で約13百万人と把握、2015年10月一人っ子政策の廃止を発表。
- * 高度人材が次々に生まれるスウェーデンの移民政策～日本より大きな国土に人口約988万人、年少人口割合17.3%高齢人口19.9%と少子高齢化が進んでいる、又人口密度が低く国内市場は小さい為外需を優先、知識集約型の先端技術産業の発展に力を入れ、首都のストックホルムから地下鉄で15分で通信機器メーカーのエリクソンは第二世代移動通信システムであるGSMを開発し多くの国で使用されて実質的に無線通信方式の世界標準技術となった、システムはスウェーデン王立工科大学やストックホルム大学の研究機関も進出し北欧のシリコンバレーとも呼ばれて移民は「高度人材」と呼ばれる人達が非常に多い。

{ 第五章 文化～衣食住の地域性は何故成り立つのか }

- * シンガポールの強さの秘訣は「みんな仲良く」一人当たりGDPは5万ドル強で世界8位、日本より高く立派な先進国で「日本と同じ資源小国」東京都23区と同じ位の国土に人口560万人、資源がなく土地が狭く、水資源はマレーシアから輸入、赤道直下で台風の影響はほとんど受けない(フィリピンは台風の都度インフラが壊れて多くの人命が失われている)シンガポールは第二次大戦中に日本の占領地だった、戦後イギリスの植民地、1963年マレーシア連邦結成、1965年独立、国民の四分の三が中国系でも優遇せずマレーシア系・インド系を平等に取り扱う、それぞれ中国語・スロバキア語・タミル語を公用語として制定、民族対立もなく非常に政情安定、又英語も公用語でみんな仲良く、周りにインドネシア・マレーシア・ブルネイ等産油国があり、原油を輸入して石油製品に加工して輸出する加工貿易に特化、又税率が低い国家としても有名で外国企業の誘致に効果、人口が少ない国の経済成長は人材育成が優先課題で「みんな仲良く」を国是として経済成長を遂げてきた。
- * 氷食地ドイツの知恵「ソーセージ・ジャガイモ・ビールは天の恵み」

ドイツには「ジャガイモでフルコースの料理を作れない女の子はお嫁にいけない」という言葉がある、北部は痩せた土地で大麦が、南部は小麦生産でそれぞれビールの原料となっている、今日では1300軒・5000種類の銘柄のビール

* イギリス料理が「マズい」と言われる本当の理由～イギリス史上唯一共和制だった時代に支配階級となったのが「ジェントルマン」でプライドが高く、服装やマナー、飲食等生き方全般に独自の生き方を決め「暴飲暴食をせず質素な食事を好む」と決めていた、料理の数は少なく肉を焼いて食べるだけ、まれにスープ、400年近くも支配階層にいた為イギリス料理の発展にとって致命的な足かせとなった。

* 世界をリードするニュージーランドの酪農～酪農とは牛やヤギを飼育しチーズやバター・生乳等の乳製品を生産して販売することを目的とした農業「豊か過ぎる」自然環境、国土面積に占める農地割合42、1% その内91、8%が牧場・牧草地で「牧草に恵まれ牛舎や飼料がいりません」つまり放牧、糞尿も天然の肥料、年中平均して降雨、人口約459万人酪農の他に羊3079万頭と人口の約6、7倍、世界最大の羊肉輸出国で世界合計に対して36% 二位のオーストラリアが32% 牛は約1018万頭で人口の約2、2倍「日本が学ぶべき文化とは？」若者が高齢者から土地を借りて「酪農デビュー」利益は折半、ある程度技術を身に付けて土地を購入独り立ちして自分が老いた時、又次世代の若者に土地を貸す、世代交代が上手くいく事は持続可能な経済発展の最重要課題。日本のバブル崩壊後の「失われた20年」は世代交代がうまくいかなかった事も原因の一つかもしれません。

* 美味しいワインは「気候」から生まれる～ワインは夏季高温乾燥、冬季は温暖湿潤を示す「地中海気候」の下で生産が盛ん、仏・伊・スペイン・アルゼリア・南アフリカ共和国・オーストラリア・米国(カリフォルニア州周辺だけ)・チリ等。

* 牛肉輸出量世界第一位！～インドを支える「牛」の力～インド人はヒन्दゥー教(創造神、維持神、破壊神の三神一体を近世の教義)を信じているから牛肉を食べないとよく耳にする話、破壊神(シヴァ)は乳白色の牡牛を乗り物として、その為牛は聖なる動物、インドの宗教構成はヒन्दゥー教80、5% イスラム教13、4% キリスト教2、3% シーク教1、9% 仏教0、8% イスラム教徒は1、7 億人とキリスト教徒を合わせて 2 億人は牛肉を食べられるので牛肉の生産・屠殺にはイスラム教徒が携わっている「水牛の頭数は世界一位」1 億940万頭で搾乳できなくなると食肉として解体、牛の飼育頭数は1、89億頭とブラジルに次いで多い、2012年水牛も含め牛肉の輸出量は世界最大の168万トン、2位ブラジル I 39万トン、三位オーストラリア I 38万トン

(おわりに) 地理とはいったい何を学ぶ科目なのか？地理とは「現代世界そのものを学ぶ科目」地理と歴史は自動車の両輪のようなもの、2022年の高校入学生より「地理総合」と「歴史総合」が必修化され漸く「本来あるべき姿」になろうとしています。地理が分かれば歴史が面白くなる、そして未来が読める。 (完)